

当麻遺跡第1地点

(相模原市No.185遺跡)

調査期間 20080401～20090130

所在地 相模原市当麻

時代

旧石器
縄文
古墳
奈良・平安
中世
近世



作成日:20090306

概要

本調査は国土交通省関東地方整備局横浜国道事務所が進めている国道468号(さがみ縦貫道路)建設事業に伴い実施された埋蔵文化財発掘調査です。

昨年から引き続きの調査であり、今年度の調査対象には塚(相模原市No.188遺跡)も含まれ、合わせて調査を行いました。調査では、昨年度調査の成果と同様、古代の集落跡の検出に加え、縄文時代の集石や旧石器時代の細石刃石器群を含む遺物集中箇所が発見されました。このように多大な成果を上げ、2009年1月末をもって全調査を終了しました。

2月からは発掘成果をまとめるための整理作業を開始しています。

細石刃石器群(旧石器時代)

当麻遺跡D区の南端、崖線に近い箇所で黒曜石で作られた細石刃石器群が出土しました。細石刃は旧石器時代の終わり頃に多く使われた石器です。鹿の角などを槍のように加工した後、その両縁に細い溝を掘り、その溝に細石刃を並べてはめ込み、狩猟道具として使用したと考えられています。

今回発見された細石刃は逆円錐ないし角柱状の細石刃石器核から打ち剥がされた石器で、その製作工程で打ち剥がさ



▲D区 細石刃核出土状況(旧石器)



▲当麻遺跡検出の集石(縄文)

れる石核の形を調整する剥片なども出土しており、当時の人々がその場で細石刃を作っていたことが分かりました。

当麻遺跡検出の集石(縄文時代)

通常見られる集石は、地面を皿状ないしはボウル状に掘りこみ、その中に焼け礫が詰まっていますが、本遺跡で発見された集石は掘りこみ底面の中心に平石を置き、その平石を囲うように扁平礫を放射状に立てて配し、更にそれらの隙間を小礫で埋めたり、周囲に楕円礫を配したりしており、その中に焼け礫が詰まっている状態で検出されました。しっかりとした施設を持った集石であり、配石とすべきかもしれません。いずれにしても通常の集石に付加的な意味を考えなくてはならないかもしれません。

相模原市No.188 遺跡(富士塚 近世)

塚は国道 129 号線を挟んで東側に谷原古墳群が存在しているため、古墳転用の塚である可能性も視野に入れつつ調査を進めました。しかし、塚内部に古墳と判断できるような埋葬施設は見つかりませんでした。おそらく伝承のとおり近世の富士塚であると思われます。盛土は黒土とローム土を互層に積み上げて作られていました。



▲C区 H15 号竪穴住居跡(古代)



▲塚 盛土断面